

第8回 BACHスクリーンコンサート 2021.12月

12月のテーマ ベートーベン交響曲第9番合唱付きとアベマリア

クリスマスソングとベートーベンの交響曲第9番合唱付きは、TVやラジオ、街のいたるところから流れてくる、いわば年末の風物詩と言えます。

今月は、第9の4楽章と三大アベマリア（グノー・シューベルト・カッチーニ）プラスクリスマスソングを楽しみましょう。



1、ベートーベン 交響曲第9番第4楽章合唱付き

オーケストラの定期公演で取り上げられることは滅多にありません。というのも、「第9は、餅代稼ぎのために年末にやる」という不文律のようなものが日本では定着してしまっており、「年末特別公演」といった形でしか演奏されないからです。いずれにしても、年末に第9を演奏するというのは、日本的習慣のようです。欧米では、新ホールのこけら落とし公演のように、「めでたい時に演奏する曲」ということになっています。東西ドイツが合併した時や長野でオリンピックの開会式など、セレモニーを皆で盛り上げる時には欠かせない曲といえます。

第3楽章が静かに終わり、荒れ狂ったように第4楽章が始まります。チェロとコントラバスで「このメロディではない」という感じで割り込んできます。まるで対話をしているようです。最後に小さく出てくるのが「歓喜の歌」のメロディです。

このメロディが次第に盛り上がってくると、再度、この楽章の冒頭と同じ音型が出てきます。この瞬間、大体合唱団がバツと立ち上がります。この光景を見ると、「年末だな」と感じます。

その後、バリトンの独唱が始まります。日本語で書くと「オー、フローーーインデ」（日本語でない？）という感じですが、第9の歌詞はすべてドイツ語です。これは「おお友よ」という意味で、この部分は、ベートーヴェン自身が作った歌詞だそうです。

その後始まる「フロイデ、シェーネル…」という有名な「歓喜の歌」の部分はシラーの詩です。その後合唱がこの部分を喜びいっぱい歌う有名な部分が続きます（日本語訳の歌詞突き）。その後急に神秘的な雰囲気になったり、トルコの軍楽隊的な伴奏の上で、テノールの独唱が始まったりと多種多様に展開していきます。次第に雰囲気が高まり、2重フーガになります。

最後は、「人類みな兄弟」といった興奮した雰囲気で全曲が終わります。

2、三大アベマリア

(1) シューベルトのアベマリア

最も知られているアベマリアです。

歌詞は、スコットランドの詩人ウォルター・スコット（1771-1832）による叙事詩『湖上の美人Lady of the Lake』から採られている。

この『湖上の美人』の物語の中で、王から追われる身となった「湖上の貴婦人」ことエレン・ダグラスは、聖母マリアに助けを求めて祈りの言葉を口ずさむ。

そのエレンの歌こそが、シューベルト歌曲『エレンの歌第3番』であり、それが『シューベルトのアヴェ・マリア』として定着することになった。

(2) グノー（バッハ）のアベマリア

バッハの《平均律クラヴィーア曲集第1巻》の「前奏曲第1番ハ長調」を伴奏に、ラテン語の聖句「アヴェ・マリア」を歌詞に用いて完成させた声楽曲です。

(3) カッチーニのアベマリア

バロック音楽初期の作曲家。カッチーニのアベマリアとして知られているが、実際には1970年頃ソ連の音楽家ウラディーミル・ヴァヴィロフ（1925-73）によって作曲された歌曲であることが分かった。

歌詞は、ただアベマリア・アベマリア・・・・・・を繰り返すだけだが旋律が印象的で、耳に残る名曲です。

スラヴァのCDで一気に知名度が高まり、多くの歌手が録音し映画にも使われています。

3、クリスマスソング

幾つかのクリスマスソングを

第九とCDの関係

CDはオランダのフィリップス社とSONYが共同開発しました。

開発段階で、フィリップス社は11.5cm（60分）を主張したが、当時SONYの副社長だった開発担当の大賀典雄さんが、最終的にヘルベルト・フォン・カラヤンが指揮するベートーベンの交響曲第9番（合唱付き）の演奏が入る12cm（74分）を主張し、このサイズになったと言われます。

11.5cm（60分）と12cm（74分）との二つの規格で二者択一の段階に来ていることをカラヤンに話すと、「ベートーベンの交響曲第九番が1枚に収まったほうがいい」と提言したと言います。ちなみに、カラヤンの「第九」は約65分です。

もっと長いオペラ曲もあるが、クラシック曲の95%はこのサイズに収まるようです。